

序 章

日米学生会議概要

日本側実行委員長挨拶	2
米国側実行委員長挨拶	3
日米学生会議の歴史	4
麻生太郎前内閣総理大臣からの メッセージ	5
過去の参加者からのメッセージ	6
宮澤喜一氏 ヘンリー・A・キッシンジャー氏	
本文中の略語について	6

日本側実行委員長挨拶

第61回日米学生会議実行委員会
日本側実行委員長 松本 秀也

75年という歳月の中で、学生は何を思い、学生の役割はいかに移り変わってきたのか。この問いかけは、日米学生会議において最大の命題、根本にある問題意識であった。人々の移動と文化交流促進により、世界は多様化する一方で、都市化や商業主義を受けて一元化の様相も呈してきた。人々はいとも簡単に地球を一周し、生命、自然科学の解明は、自然との共存の時代から自然破壊を引き起こすに至り、世界はより難解かつ大規模な問題に直面しながら、21世紀という時代を迎えた。このような時代の流れを受け、日米の学生ができることは何なのか。日米の学生が議論すべきことは何なのか。環境問題や核廃絶。気付けばそれらは、もはや日米の問題のみならず、地球規模にまで拡大していた。

「日常から世界、日米から地球へ～国際社会を見据えた対話と発信～」このテーマには、まさにそのような地球規模に発展した問題に日米の学生がいかに知恵を絞り、日米学生会議の中でこれらの問題に言及できればという想いがこめられている。

国際交流が盛んに行われる現代において、日米の学生交流は、日常的で、自然なものとなってきた。我々としては、そこに一抹のもどかしさを感じると共に、一方でこの日米学生会議にしかできない対話や相互理解の構築は、頻繁に交流が行われ、「最も成熟した二国間関係」と評される現代の日米関係においてさえ、必要不可欠であると感じるようになった。72名の学生が1ヵ月寝食を共にし、議論を重ね、意見を交換し、価値観を醸成していくプロセスは、何にも変えがたい意義なのである。

一日常から世界、日米から地球へー

「環境と持続的な発展」、「国際開発」、「食糧安全保障」という地球規模の問題を扱った各々の分科会では、歴史を省み、より良い世界構築への糧となった。また教育分科会では、「地球市民教育」という理念を目指し、グローバルな世界で共有されるべき教育の在り方について議論が行われた。またBRICs諸国の現状と今後の日米とBRICsとの関係を考え、議論した「BRICs」分科会は、より広範な世界の潮流を捉える意味で、日米学生会議においても新しい一歩となった。国や組織の中

における、個人と公共の在り方、双方の関係を死刑制度など具体的ケースを用いて検討し、日米双方の倫理観や価値観の相違を確認し、共有した「公と私」分科会。健康の定義が肉体的、精神的なものだけでは表現できない今日、多様な視点から健康の概念やQOLの定義を模索した「現代社会と健康」分科会における作業は、現代の生活様式や人々の精神的及び肉体的変化を知る上で非常に有意義であったろう。

振り返れば、東京で出会い両国学生の間には芽生えた不安は、函館では疑念に、長野では友情に、そして京都では信頼へと移り変わったように思う。1ヵ月という期間は、双方の「理解」を達成する上で十分なものとは言えないかもしれないが、各々が各々を理解しようと努め、妥協し合う心は、深く長い交流の歴史、二国間関係に蓄積のある日米両国の学生だからこそ可能であると、私は強く実感した。言い換えれば、日本と米国の築いてきた関係は、学生の我々の気持ちの中にも、互いを深く見つめ合おうとする姿勢を自然に植えつけてくれたものと思う。

会議の中で、自らの限界を感じる事が多々あった。しかしながらこの限界は、日米学生会議という特殊な環境や、集まった友の思いにより克服されていった。1ヵ月の中で繰り返される「日常」により乗り越え生まれた相互理解は、何よりも強い。この相互理解、および1ヵ月で培った信頼の積み重ねこそが、本会議後の各々の人生において、やがては国際社会への「発信」、そして世界の諸問題に日米で協調的に携る上で、大きな一助となると私は信じている。

最後に、創立75周年という節目の日米学生会議に自らが参画できたこと、未曾有の経済情勢悪化にも拘わらず、変わらぬご指導、ご協力を賜った国際教育振興会、企業各社、財団、日米学生会議アラムナイの皆様、その他本会議でお世話になった各開催地の皆様を含め、全ての人に感謝の意を表し、日本側代表として、ここに第61回会議終了のご報告をさせていただきます。

-Toward Global Awareness : Everyday Impact Through Interactive Empowerment-

アメリカ側実行委員長挨拶

Colin Moreshead

Chairperson, American Executive Committee
61st Japan-America Student Conference

The 61st Japan-America Student Conference began in the same way the Conference has in each year previously with the gathering of bright, young faces and a determination to conquer a number of monumental tasks over the coming month. That is, perhaps, where the specific similarities between the 61st Conference and previous ones end. Each year's conference is perfectly unique, and ours was no exception; on a personal level, I found there to be countless differences between the 60th Conference in America and the 61st in Japan. However, it was in combining this ardent dynamism with the knowledge of our deep-rooted traditions that we were able to produce a significant experience for our participants.

The Japan-America Student Conference looks very different now in 2009 than it did in previous decades. The topical issues have shifted entirely, and despite the bilateral nature of our Conference, the global community is more and more worthy of our concern. This year's theme was "Toward Global Awareness: Everyday Impact through Interactive Empowerment." Part of this theme's message was that neither Japan nor the United States can afford to think inwardly anymore. Even in our relationship with one another, we must begin to collaborate more on solving international problems rather than focusing only on our own. The 61st Conference's participants came to the table this year with the privilege of coming from two of the world's premier powers. They did not take that privilege for granted, however, and committed themselves to working hard as students on the international and community level. It is in that interest that JASCers renew their efforts every year in the hopes of attaining heightened understanding between two peoples.

We were honored to be at Aoyama Gakuin University for our 75th Anniversary event. Our day there was a resounding success for our Conference, and there were many alumni, friends and supporters in attendance. Having seen the photo of the first JASC delegation countless times, taking our anniversary photo there was a surreal and evocative experience. The 61st delegates, having only just begun their experience, were still unsure about what would be in store for them over the next month. Now, as we look

back on our Conference, we reminisce on the three-quarters of a century that have passed and what the next three-quarters may bring.

During our stays in Tokyo, Hakodate, Nagano and Kyoto, we were met with overwhelming hospitality that could not possibly have been expected. Through all the time spent in roundtable discussion, traveling, and researching our various topics, the underlying factor that tied our Conference together was indeed the interaction we enjoyed with the Japanese people we met wherever we went. In particular, our stay in Nagano Prefecture's Obuse town stands out as a growing and empowering experience for our delegates. The town opened itself to us in such a way that we were able to meet and speak to people from all walks of life and see the inner workings of a community not so often seen by foreign visitors in Japan. Even for many of our Japanese delegates, it was a completely new setting with many surprises. As our theme was so focused on the relationship between community and the world, we took our few days in Obuse as a valuable opportunity to hear another perspective on world issues.

This year's Conference was a fantastic amalgam of urban and rural, new and old, local and global. Our scope was broad and our ambitions great, but after all, 72 people walked away from the 61st Conference with new understanding and the means to work together to solve modern problems. It is a testament to our program that both the Japanese and American sides received a considerably high number of applications this year. I am confident that next year will continue the tradition in much the same way; thanks to the continued support of our many friends and alumni, the future of the Japan-America Student Conference is bright. I would like to thank all of our supporters who continually make the Japan-America Student Conference possible. For those in both Japan and the United States, without the enthusiasm and kindness of such people, we would be unable to enjoy many of amenities that contribute to the success of the Conference. For this, I would like to extend thanks to everyone involved, on behalf of the 61st delegation and executive committee. Thank you very much!

日米学生会議の歴史

日米学生会議は、1934年、満州事変以降悪化しつつあった日米関係を憂慮した日本の学生有志により創設された。米国の対日感情改善、日米相互の信頼関係回復が急務であるという認識の下、「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである」という理念が掲げられた。当時の日本政府の意思と能力の限界を感じた学生有志は、全国の大学の英語研究部、国際問題研究部からなる日本英語学生協会（日本国際学生協会の前身）を母体として、自ら先頭となって準備活動を進めていった。資金、運営面で多くの困難を抱えながらも、4名の学生使節団が渡米し、全米各地の大学を訪問して参加者を募り、総勢99名（うち22名は大学教授、およびその夫人でオブザーバー）の米国側代表を伴って帰国した。こうして第1回日米学生会議は青山学院大学で開催され、会議終了後には満州国（当時）への視察研修旅行も実施されるに至った。

日本側の努力と熱意に感銘した米国側参加者の申し出によって、翌年第2回日米学生会議が米国オレゴン州ポートランドのリードカレッジで開催され、以後1940年の第7回会議まで、以下の通り日米両国で毎年交互に開催されることとなる。第3回（1936年）早稲田大学。第4回（1937年）スタンフォード大学。第5回（1938年）慶應義塾大学。第6回（1939年）南カリフォルニア大学。第7回（1940年）津田塾大学。しかし、太平洋戦争の勃発に伴い、日米学生会議も中断を余儀なくされた。

終戦後、会議復活の声が上がり、当時の学生とかつての参加者の努力により、日米学生会議は1947年に再開し、第8回を迎えることとなった。しかし、当時日本は占領下であり、米国からの学生を招くことが不可能であったため、在日米兵および軍属の中から、大学生の資格を持った者を選んでの会議再開であり、1953年の第14回会議まで日本のみでの開催が続いた。翌1954年、第14回会議に参加したコーネル大学の学生の提案により、第15回会議が戦後初めて米国の同大学で開催されることが決定した。しか

し、当時の日本の経済状況では、日本側参加者の渡米費用を捻出することは容易ではなく、米軍の輸送機の提供を受け、15名のみ日本側代表が参加するに留まった。

これがきっかけとなり、日本に留まった参加者の中から「2国間関係のみならず、多国間での学生による交流が行われるべき」との声が強まり、日米学生会議を国際学生会議に発展的に解消することが決定され、同じく1954年、アジア地域の学生との会議を主目的に第1回国際学生会議が開催されることとなる。なお、国際学生会議は現在も、関西地方を中心に、各国から留学生を招集する形態で継続されている。一方の日米学生会議は、この決定により、1954年をもって、再び中断されることとなった。

1963年に至り、翌1964年が第1回会議創立の30周年に当たることもあり、日米相互開催の形での会議再開を望む声が高まった。これを受け、第1回会議創始者が多数の理事を務めていた財団法人国際教育振興会が日本側主催者としての責任を取ることで会議が再開されることが決定された。第1回及び第2回の米国側参加者の努力もあり、1964年、日本側参加者77名と米国側参加者62名による、第16回会議が実現し、ゆかりの深いリードカレッジで開催されることとなった。1964年は、東京オリンピックが開催された年でもあった。

その後、日米相互開催の下、会議は継続されるが、1973年第25回会議において、当時の学生によって抜本的な改革がなされ、現在の会議の基本形態が整備されることとなる。それは主に、限られた日程の中での議論をより効率的かつ集中的に行うために、毎年の会議ごとにテーマを設定する、期間を1ヵ月間とする、などである。円が変動為替相場制に移行し、米軍が南ベトナムより撤退した1973年でもあった。

1978年には、戦前の日米学生会議参加者有志により、会議の継続に必要な経済的支援を主目的とする、国際教育振興会賛助会が設立され、会議永続への道が開けることとなった。また、次いで第31回会議が開催された1979年には、米国においても戦前の参加者によりJASC, Inc.が設立され、米国側実行委員会をサポートする体制が確立された。

その後日米学生会議は、財団法人国際教育振興会とJASC, Incの協力の下、日米両国学生が主体的に企画・運営を担うという形態を取る中で、継続されることとなる。そして2007年度にアメリカ側支援団体であるJASC, Incは、ISC, Inc (International Student Conferences)と名前を変え、他国との学生会議開催も視野に入れ始めた。創設時と今日では日米両国を取り巻く環境は大きく異なり、会議の形態自体も変化している。現在の日米学生会議は、会議創設時の理念を受け継ぎつつも、時代の変化に対応し、今日に至っていると言えよう。

前内閣総理大臣からのメッセージ

第61回日米学生会議の開催を、心よりお祝い申し上げます。

日米学生会議は、1934年の開始以来、今日に至るまで75年にわたり、日米の学生の企画・運営により活動を継続してきました。日米学生会議が、両国の相互理解と友情の促進に大きく寄与してきたことを、喜ばしく思います。

日米両国は、自由、民主主義、人権の尊重などの共通の基本的価値を基盤とし、安全保障を始め、政治・経済等の幅広い分野において協調していく関係にあります。また、東アジア地域には、現在も不確実性が存在する中、日米同盟は、日本のみならず、アジア太平洋地域の安定と発展にとって、不可欠な役割を果たしています。

私は、本年2月に訪米し、オバマ大統領就任後、ホワイトハウスを訪問する最初の首脳として、会議を行いました。会談においては、北朝鮮問題、気候変動、核不拡散問題を含め、幅広い分野について話し合い、日米同盟を一層強化していくことで一致しました。特に強調したいのは、日米両国は、手を携えて、世界の平和と繁栄に向けて力を尽くしていくことで合意していることです。アフガニスタン、パキスタンへの支援、テロとの闘いにおける日米協力は、その例です。

本年の日米学生会議のテーマ「日常から世界、日米から地球へ～国際社会を見据えた対話と発信～」

が示すとおり、日米両国は、世界が直面する地球規模の問題の解決のため、あらゆるレベルにおいて対話を重ね、ますます緊密に連携していかなければなりません。未来を担う皆様が、この日米学生会議を通じて、日米両国が国際社会において果たすべき役割や、明るい未来に向けた施策について、活発に議論し、多くの有意義な提言をされることを期待しております。

平成21年7月29日
日本国内閣総理大臣
麻生 太郎

Welcoming Remarks

I would like to extend my sincere congratulations on the holding of the 61st Japan-America Student Conference.

Over the 75 years since its beginning in 1934, the Japan-America Student Conference has been continuously engaged in activities through planning and execution by Japanese and American students. I am very pleased that the Japan-America Student Conference has contributed so significantly to the promotion of mutual understanding and friendship between Japan and the United States.

Japan and the United States enjoy a relationship in which we coordinate across a wide range of fields including security as well as politics and economics among other areas, with the common fundamental values of freedom, democracy, and respect for human rights serving as the foundation. In addition, within the ongoing context of uncertainty in the East Asian region, the Japan-US alliance plays a vital role in the stability and development of not only Japan but also the entire Asia-Pacific region.

In February this year I visited the United States for a summit meeting as the first Prime Minister to visit the White House after President Obama took office. Our discussions covered a

broad spectrum of areas including the North Korean issue, climate change, and nuclear non-proliferation, and we agreed to reinforce the Japan-US alliance even further. I would like to emphasize in particular that Japan and the United States are in agreement to work hand in hand in our efforts to bring about global peace and prosperity. Examples of this include cooperation between Japan and the United States in extending assistance to Afghanistan and Pakistan and also in efforts to counter terrorism.

As the theme for this year's Japan-America Student Conference, "Toward Global Awareness: Everyday Impact Through Interactive Empowerment" indicates, Japan and the United States must deepen its dialogues at every level and engage in even closer cooperation in order to resolve the global issues now facing the world. I hope that through this Japan-America Student Conference you who will play a major role in shaping the future will actively discuss the roles that Japan and the United States should play within the international community as well as policies and measures that will lead to a bright future. I very much look forward to numerous meaningful recommendations emerging from your discussions.

Taro Aso
Prime Minister of Japan
July 29, 2009

過去の参加者からのメッセージ

元内閣総理大臣宮澤喜一氏

1939、1940年日米学生会議参加者

As one whose own first involvement in Japan-U.S. relations was under the auspices of the Japan-America Student Conference in 1939, I can tell you honestly that it was one of the formative events of my lifetime. Having stood in your shoes

more than fifty years ago, I sincerely hope that you will take full advantage of your participation in the JASC.

元アメリカ合衆国国務長官ヘンリー・A・キッシンジャー氏

1951年日米学生会議参加者

I had had little opportunity, in this post-war period, to meet and exchange views informally with Japanese people. The Japan-America Student Conference provided that opportunity, and from it came many valuable new perspectives on Japanese culture and society. It was also at that time that my interest was awakened in Japanese artistic and aesthetic traditions, and appreciation which remains with me to this day.

本文中の略語について

JASC(ジャスク)：日米学生会議(Japan-America Student Conference)の略。

JASCer(ジャスカー)：日米学生会議参加者。過去の参加者も含む。

ISC, Inc：アメリカ側主催団体であるInternational Student Confereces, Incの略。

EC：実行委員会、または実行委員Executive Committeeの略。

AEC：米国側実行委員会American Executive Committeeの略。

JEC：日本側実行委員会Japanese Executive Committeeの略。

デリ、デリゲート：日米学生会議参加者。Delegate。

ジャパデリ：日本側参加者。

アメデリ：アメリカ側参加者。

アラムナイ：日米学生会議の過去の参加者。

サイト：本会議開催地の意味。長野サイト等。

RT：参加者がいずれかに帰属する分科会のこと。Round Tableの略。

リフレクション：参加者が会議の感想や反省点を話し合う場。